

「GIGA スクール時代の ICT リテラシー教育の充実に向けて」

(2022 年度 ネットの安心・安全シンポジウムの概要報告)

2022年8月25日(木)に当財団主催の「ネットの安心・安全シンポジウム」をオンラインで開催しました。GIGA スクール施策により小中学校での一人一台端末配備が着実に進む一方で、ICT を上手く活用して授業内容の充実を図ることに苦勞されている教育現場も少なくないです。今回は、社会全体でデジタル化が進展する中、将来的に ICT リテラシーの高い人材を輩出するべく奮闘している高等学校の取組みを議論することで、その前段の小中学校の取組みにも参考となるような示唆を得る機会としました。シンポジウムには各高等学校の生徒の皆さんも参加して議論しました。

登壇者(敬称略。所属・役職は当時のもの。):

[コーディネーター]

竹内 和雄

兵庫県立大学

環境人間学部准教授



[パネリスト]

武藤 久慶

文部科学省初等中等教育局

学校デジタル化プロジェクト

チームリーダー



丸山 岳志

兵庫県たつの市立東栗栖小学校

教頭

&

田渕 明人

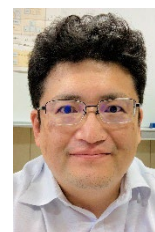
兵庫県たつの市教育委員会事務局

教育管理課学校教育課

課長



澤田 真泰
北海道石狩南高等学校
情報科主任
教諭
(+生徒)



浅沼 翔太
東京都立美原高等学校
情報科主任
教諭
(+生徒)



米田 謙三
関西学院千里国際中高等部
進路センター長
教諭
(+生徒)



藤井 美凧
デジタルアーツ株式会社
マーケティング部
副主任



侘美 千夏
日本マイクロソフト株式会社
文教営業本部
事業戦略担当部長



以下にシンポジウム模様を報告します。

■はじめに

竹内：「GIGA スクール時代のICTリテラシー教育の充実」がテーマです。小中学生が1人1台端末の整備が続いている一方で、現場は非常に困っています。今日は、一歩先を進んでいる高等学校の取り組みを高校生の生の声を聞くなかで、見えてきた課題と今後の方向性をみんなで一緒に考えたいと思います。皆さんよろしくお願ひします。

<<パネリストからの発表>>

■文部科学省 武藤リーダー

武藤：GIGA スクール構想の現状ということで、義務教育段階を中心にお話しします。GIGA スクール構想は、1人1台端末と高速通信ネットワークを活用することによって、子どもたち一人一人に応じた個別最適な学びと、協働的な学びを一体的に充実しようという構想です。この「Global and Innovation Gateway for All」は、すべて

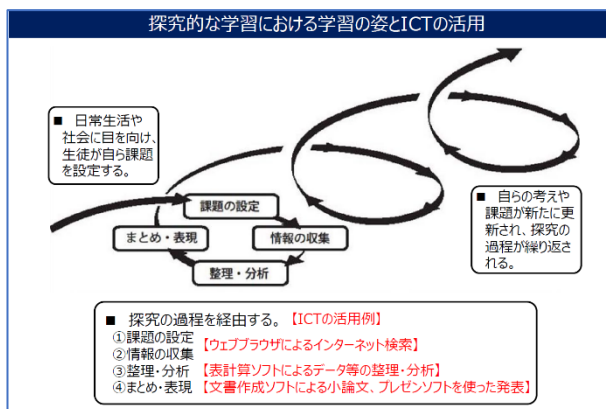
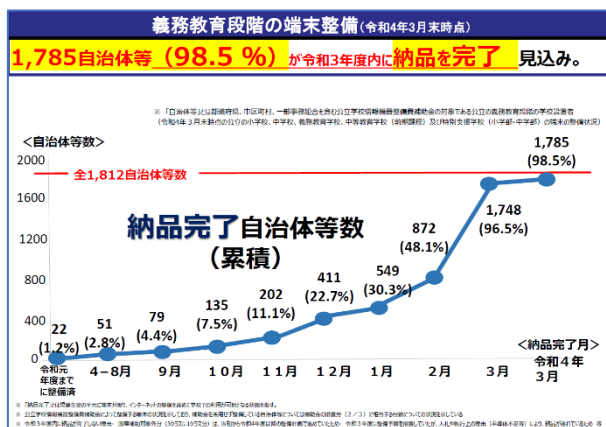
の子どもたちに、1人1台の端末が世界の扉になって、新しい価値を創造していく扉になってほしいという思いを込めて作られたものです。すでに義務教育段階では、ほぼ100%端末が届いています。高校のほうは、すべての都道府県で、令和4年度中に1年生が1人1台になって、令和6年度までに全学年で整備が完了する予定になっています。

義務教育段階でもかなり活用が進んでいて、コロナ禍においてもオンラインで朝の会を行ったり、そのあと登校できるようになってもオンラインでやって、慣らして行って、いつでも、何があっても、学びが保証できる取り組みがされています。

実物投影機を使って黒板で大きく映しても、一番後ろの子どもはなかなか見えないので、ウェブ会議ソフトで中継して全員がわかる授業を展開しています。また、課題を設定して、情報を収集し、整理、分析して、まとめ・表現するという探究のサイクルを非常に速いスピードで回すことが可能になっています。

小学校の隙間時間には、例えば日記を書いたり、タイピングの練習をしたり、プログラミングをしたり、いろんな活動を子どもたちが思い思いにしています。同じ隙間時間ですが、個別最適な学びが展開されていて、例えばAくんはタッチタイピングの練習をやっていて、Bくんは地図を見ている、Cくんは算数を勉強していて、スライドを作っている子もいる。外国籍のEさんには、教師が意図的にサポートしている。こんな風景が、全国で展開されています。

自分の姿を見て、自分で学習を調整していく。自分で学習を振り返って、次に生かしていことも行われています。動画を見ながら学ぶ、あるいは、動画を見ながらスライドをつ



くる。ゴールは同じだけれども、自分で学習方法を選択して、みんな異なる方法で進める。そんなことも全国で展開されています。同じクラスのなかで、いろんな学習が同時に進行していることが先進的な自治体では行われています。

例えば社会科で、太平洋戦争までの流れを、フィッシュ・ボーン図を使ってまとめるなど、様々なまとめ方をそれぞれの子どもたちがしています。先生は、戦争への流れということを押さえたうえで、太平洋戦争を起こした一番の原因は何かという発問をされました。この発問によって子どもたちの思考が刺激され、議論が非常に盛りあがる。ただ単純に共同編集をして、班の考えに自分の考えがマージされていくのではなく、最初に自分の考えを書いて、班で議論して、そして班の議論も踏まえて、最終的に自分の考えは何なのかと、学びを深めていくような活動を行っている学校もあります。

学校で1人1台端末が無かった頃と比べると、授業が楽しくなった、分かるようになった、自分のペースで進められるようになった、友達と協働できるようになった、こんな意見が非常に多く出てきています。

こういう状況が生じている地域や学校と、そうではない地域では、学校の差が生じてきているのも事実で、この差をいかにしてスピーディーに埋めていくのが、文部科学省の我々チームの一番のチャレンジという状況になっています。

■北海道石狩南高等学校 生徒さん

菊池（生徒）：私たちは、昨年度北海道アプリコンテストに出場し、審査員特別賞を受賞した、アプリつくれちゃう系女子です。一人ずつ自己紹介をします。はじめに、来世生まれ変わるなら鳥になりたい、優雅系女子、菊池都香沙です。

奥崎（生徒）：次に、昨日の夜ご飯はラーメンにから揚げ、コイカラDK女子、奥崎日向子です。

三田（生徒）：最後に、毎朝の目覚ましはママの怒鳴り声、フクロウ系女子、三田花音です。

奥崎：私たちの学校では、コロナの影響で学級閉鎖になると、リモート授業が行われています。リモート授業では、学校に行く準備の時間が必要なく、落ち着いて過ごせるようになりました。特に花音なんかはそうだよ？

三田：リモートになったら、いつもよりたくさん寝られるし、あとは大雪や台風の時でも外出せずに授業が受けられるのはいいよね。

菊池：しかしリモート授業では、先生が一方向的に話をするのを聞くだけになってしまいま

遠隔授業の **ココ** がいい

朝に時間に **余裕** を持てる

悪天候時にも **予定通り** に授業ができる




す。また、対面授業では、周りに友達がありますが、一人で授業を受ける孤独感もあります。一人で授業を受けていると、わからないことがあったときに、周りの友達に聞けないし、発言もしにくい。いつもなら授業の終わりに先生に質問できたのに。

三田：機械に不慣れな先生のトラブルで、授業開始が遅くなることもあった。始まるまでに20分も待たされた。次に個人用端末についてです。最近、小中学生を中心に、1人1台端末が与えられて授業が行われていますが、端末が高すぎます。私の好きなグミは、450個も買うことができます。

菊池：最近1人1台端末があるなら、コンピューター室はいらなくない？みたいな論争があるようです。コンピューター部副部長の私から言わせていただきます。動画の編集やゲーム制作など、部活で行う作業には、性能の高いパソコンが必要です。また、後輩とコミュニケーションが取れる大事な場所なので、残しておくべきだと思います。

●個人用端末は
機能面では高性能とは言えない…
→学校の性能の良い
PC&PC室は必要！

●大切な
コミュニケーションの場である



■東京都立美原高等学校 生徒さん


角田（生徒）：東京都立美原高等学校生徒会をしています、角田彩音です。

大西（生徒）：同じく生徒会をしています、大西泰知です。


角田：都立高校での学びはスマスク端末の導入でどのように変わったのか、見ていきたいと思います。学校で使っている、1人1台端末、スマスク端末は、東京都で使われているスマートスクール端末の略になります。

大西：スマスク端末の成果は、主に3つ挙げられます。オンライン授業を学


スマスク端末の「成果」



[1] オンライン授業での活用



[2] ツールの活用で確かな学びへ



[3] ペーパーレス化、データで共有

3

校で行い、授業を配信しています。オンライン授業では、画像を使って行います。YouTubeで復習動画を配信していて、おうちでも授業が受けられます。Microsoft Teamsを活用した授業で、自宅から授業に参加したり、マイクやチャット機能で、対面授業と同じように発言もできます。YouTubeで配信される復習動画で、学習意欲の向上にもつながっています。

Microsoft Teamsでは、観点別評価をする課題のルーブリック機能があり、この評価基準を確認して、生徒一人一人が作品を制作しています。課題は生徒に返却され、先生からの評価や、フィードバックを確認できます。

Classi はポートフォリオを入力して、生徒が意見を記入したり、生徒が記入した意見や感想の多さに応じて文字が大きくなったりするワードクラウド機能で、生徒一人一人の意見をよりわかりやすく視覚化することもできます。スマスク端末で作成した課題は、Teams を通じてオンラインで提出したり、Classi のポートフォリオで意見を発表することもできます。このような機能を通じて、生徒一人一人が課題に取り組みやすい環境をつくっています。

美原高校で開催している四葉祭という名の文化祭についてのアンケートや、Microsoft Forms を使って、学校への通学時間などのアンケートを行っています。このアンケート機能で、健康観察をオンラインで実施することで、生徒一人一人の健康状態を教員が迅速に把握することができたり、スマスク端末で回答することで、アンケート結果もデータで保存、共有ができます。

角田：スマスク端末の課題について説明します。スマスク端末の課題は、2点あります。まずスマスク端末が重いことが、とても不便だと感じています。教科書と一緒に持ち歩くとカバンがとても重くて、10 キロを超える日もあります。紙の教科書を撤廃して、スマスク端末にデジタル教科書を導入して、スマスク端末1台で授業ができると思います。



2点目が、操作が不慣れな生徒へのケアということです。1時間の間に、課題の提出やアプリのインストールが終わらない生徒がたくさん出ています。先生のヘルプ待ちの時間が生じているのが問題です。校内での ICT 支援の体制をさらに充実させることや、端末の操作スキルを小中学校のうちから身につけていくことで、高校での学びがよりスムーズになると感じています。

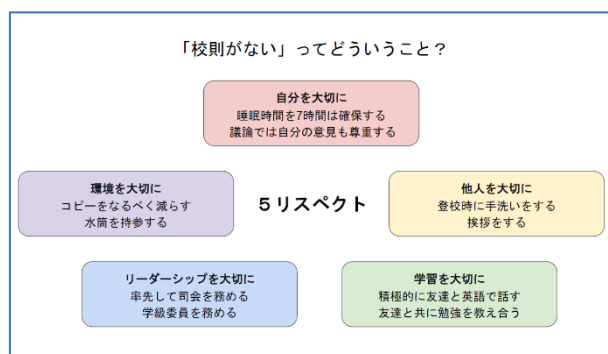
スマスク端末が文房具のような身近な存在になることで、筆箱の次にスマスク端末になるような時代を望んでいます。小中学校でも充実した学びをよろしく願います。

■ 関西学院千里国際高等部 生徒さん

長谷川（生徒）：僕たちは JK でも、生徒会でもない、一般普通生徒です。

渡辺（生徒）：別に来世は鳥にはなりたくないですが、渡辺加奈です。学校の2つの特徴を皆さまにお伝えしたいです。まず1つ目の特徴として、うちの学校は校則がないです。その代わりに、自分を大切に、他人を大切に、学習を大切に、リーダーシップを大切に、環境を大切に、この5つのリスペクトを大切に守ることで私たちの学校は成り立っています。

す。例えば、自分を大切にすれば、私は睡眠時間を5時間しか取れないので7時間を確保するだとか、彼の場合は議論では自分の意見も尊重するとか、それぞれに解釈が異なるのが5リスペクトの特徴です。これによって、生徒は自己責任を負う。言い換えると、自分のことは自分で管理することが養えます。



それを可能にしたのが、2つ目の特徴であるBYAD/BYODシステムです。これは生徒一人一人が個人の端末を利用するシステムですが、BYADは、特に中学生にアプライされるもので、生徒が学校から支給されたデバイスを学習に活用するシステムになります。高校生になると、BYODと呼ばれる生徒が個人的に保有するデバイスを使って学習に活用します。中学生はBYADなので、全生徒が同じものを使うけれども、BYODになると自由度が高まって、ある生徒はAppleを使ったり、ある生徒はGoogleを利用したりします。

長谷川：具体的に学校でどんなふうにGoogleを活用しているかを説明します。まず1つ目がGoogle Docs、ドキュメントです。1つの課題を決めて研究するというもので、あらかじめ文章が送られてくるので、それを調べることで自分風にするのです。

次がGoogle Slides、スライドです。これは隣の渡辺加奈さんのスライドですけど、何をやらせてたのですか。

渡辺：『STEAM』というWEBサイトから自分の好きな動画を参考に、その動画から自分は何を読み取ったのかをスライドに落とし込んで、最終的にクラスで発表しました。私は、特にソーシャルビジネスについての動画を見たので、そのプレゼンです。

長谷川：だそうです。次に、Google Forms、いわゆるアンケートみたいなやつです。学校に登校する前に体温チェックがあるので、朝起きて、家を出る前に熱を測って、症状がないですか、症状がある人は病院へ行きましたかとか、を毎朝送っています。Classroomというのがあって、クラスごと、単元ごとに先生が作っています。例えば、これは僕のClassroomで、数学Ⅱで、期限：月曜日、第1回MISSIONプリントと、数学で1回目の宿題が出ましたと入っている。これをタップしたら、提出期限を守っている、内容を丁寧に理解しているとか、評価が書いてある。ここに数学の問題があって、これを解いたもの提出してね、となっています。

最後に、明日、ホームルームでやることを決めたいから集まってね、と日曜日の午後に学校の先生から連絡してきた。こんなふうに先生と24時間つながっている状態なので、連絡を取り合うことが可能で、すごく便利です。

総合的なメリットとデメリットです。メリットは楽です。何をするにしてもすごく楽です。例えば板書って、ノートに書かないといけないですが、今だと、写真を撮って家に帰って読み返して、自分のペースで書いたりできる。これは **Bring Your Own Device** だからこそできると思う。自分が使い慣れている **iPhone** 製品同士だと楽なことが多いです。宿題も **Forms** で送られてくると、いちいち書くという作業をしなくて済むのは、すごくメリットと思うのです。

メリット・デメリット

メリット

- ・楽
- ・作業しやすい

デメリット

- ・勉強面で覚えにくい
- ・パソコンないと死ぬ
- ・先生も生徒も活用できないといけない

逆にデメリットは、書かなくなると覚えにくいことが多くなるのです。単語テストとかの単語の表が送られてきたとして、それを書いて覚えるときに単語帳のほうが便利なお話があります。勉強面でやりにくいことがあると感じます。「パソコンがないと死ぬ」というのは、例えば国語の教科書を忘れたけれど、数学は受けられるとかいうのが、パソコンがないと何も受けられなくなるのです。ノートはあるにしても、資料と教科書がないと授業が受けられないです。パソコン1台になって、充電し忘れたとき、家に忘れたときも、一日何もできない日とかが発生してしまいます。先生も生徒も活用できないといけない。生徒だけが使えたらいいではなく、先生がちゃんと使えないと駄目です。こういうデメリットがあるけれども、基本的にはメリットのほうが大きいと思います。

■兵庫県たつの市立東栗栖小学校 丸山先生（たつの市教育委員会）

丸山：たつの市の取り組みは、昨年度まで市教委の担当者だった丸山が説明します。今現在は、学校現場で取り組んでいる者としての立場でも発表したいと思います。たつの市は、赤とんぼや、そうめん揖保乃糸で有名な所で、小学校16校、中学校5校、約6,000人の児童生徒が在籍しています。私が勤務している東栗栖小学校の1学期には、1年生は校長先生から端末贈呈式を行って、参観日でも保護者と一緒にログインをしました。また、操作したり、体験をしたりしながら学年ごとにいろいろなチャレンジをしています。キーボード入力もとても速くなっています。学級会での活動や、書写での振り返りを蓄積する活用など、さまざまな学習場面についての活用を進めています。子どもたちを見ていて、スライドに対してのコメントをお互いにして、ブラッシュアップをしていくという活動がとても印象的でした。パソコン上でも友達と関わり合うということは、やはり楽しいんだなと思いました。

職員間でも活用しています。指導案検討でクラウドを活用して、事前に相談事を入力して行って、実際に対面したときに、時間短縮で深い話し合いができています。夏休みは今年度から持ち帰りをしますが、1行日記とかで教師がコメントをして、夏休みでも子ども

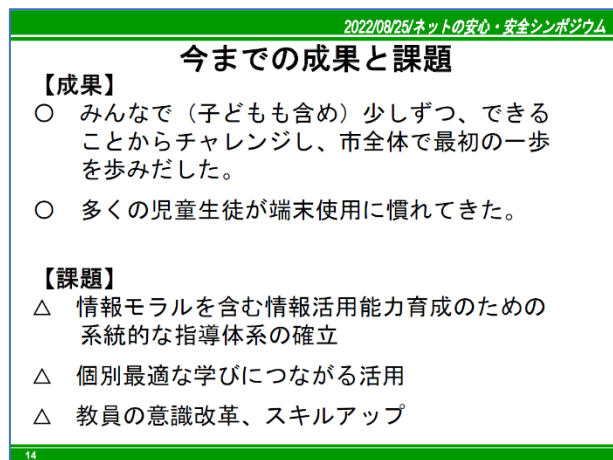
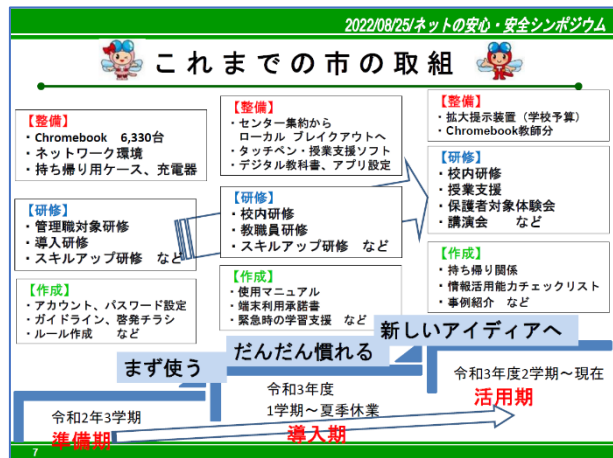
とつながることをしています。

たつの市の取り組みでは、たつの GIGA スクール構想が目指していることは、勉強をもっと楽しく、学校生活をもっと豊かに、そして自分の力をもっと伸ばしていくということです。GIGA スクール構想はまったく新しい環境ですので、多くの方に教えていただいていたいただきました。小学校でも使う、慣れる、チャレンジで、どの学校も進んできています。中学校では、まず先生が慣れる。校務での活用から進んでいました。校長会もペーパーレス化、研究会や研修会の持ち方も変わってきています。少しずつ1人1台の活用が動き出してきています。たつの市では、中学生サミットを開催して、中学生と端末の上手な活用について話し合いを進めています。昨年12月のサミットでは、Chromebook 三か条を発表しました。今年は8月2日に行い、学習の道具として使っていきたいという良い面もあれば、もっと使いたいというふうな改善点も見られています。

まとめますと、市全体で最初の一步が歩み出せました。課題としては、情報活用能力育成のための指導体系の確立とか、教員の意識改革、スキルアップ等が必要なこと、また、一斉の時間での個別活用になっているので、個別最適な学びにつながるような活用ができたらいいなということ。さらに、学校でルール等、使い方を決めていても、生徒会執行部が代わればなかなか継承が難しく、それを基にブラッシュアップしていくことが、まだまだ課題になっています。

■ デジタルアーツ株式会社 藤井様

藤井：フィルタリングについてお話しします。セキュリティー関連のソフトウェアのメーカーで、企画から開発、販売まで一貫して行っている会社になります。いろんなセキュリティー製品を提供していますが、今回は、主力製品である Web フィルタリングソフト、i-FILTER のお話をします。会社は、フィルタリング製品というところで、学校向けにもフィルタリング製品を開発しています。ICT 教育が進むにあたって、さまざまな課題があ



と思います。そういった課題を一手に解決できるのがフィルタリングソフトです。

できることを4つ紹介します。まずは無関係な動画や不必要なサイトへのアクセス、授業中にやられてしまうと困ります、をブロックすることができます。また、ウイルス感染をさせるような、子どもたちが目で見抜けない危険なサイトへのアクセスもブロックすることで、安心して授業を受けられる

対策①フィルタリング、Webサービス制御

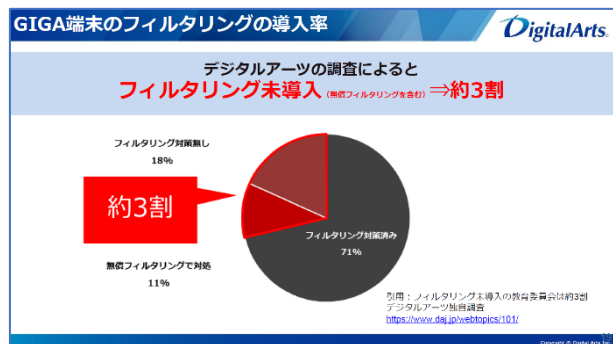
フィルタリング機能

授業に不必要なサイトに
アクセスさせない環境を実現

授業中の私的利用を防ぐだけでなく
ウイルス感染させるようなサイトも
ブロックして情報を守る

環境を提供します。その他、端末を与えたことによって、つつい使い過ぎてしまう健康被害も出てきていると思います。i-FILTERであれば、インターネットの利用時間帯を制御することも可能で、平日のみ使わせたり、何時まで使わせるといった設定ができます。その他、子どもの端末利用状況が把握しづらい悩みとかも、i-FILTERの機能では、アクセスログの取得ができて、生徒さんが何時にどこにアクセスしたかとか、何にアクセスしようとしてブロックされたかとかを、先生方が把握することができます。さらに、目の見えない所でのコミュニケーションが増えてしまうという懸念事項も、「うざい」といったような、他人を中傷する書き込みなどをブロックしたり、自殺、家出といった危険な単語の検索をブロックして、教職員の方にそういった事象をメール通知することで、何かしらのトラブルを未然に防ぐような対策も可能です。こういったコツコツとした開発が、教育委員会の方にも評価されており、「i-FILTERを入れていけば安心して使わせられます」とか、「リアルタイムで何かあったらお知らせしてくれるのは安心です」といった声を頂いています。そんな大切なフィルタリングをもっといろんな人に知ってほしいので、スマホトラブルに関するアプリの開発とか、情報リテラシー授業を全国で行うといった活動もしています。

フィルタリングはすごく大切ですがけれども、まだまだ導入が進んでいないという現状があります。教育委員会のなかでも、フィルタリング対策済みのところが7割で、無償フィルタリングで安易なものを使っていたり、フィルタリングしていないところが約3割といった結果になります。また、警察庁



の調査では、SNSでの被害児童に、被害にあった当初、約9割がフィルタリングを使っていなかったという結果も出ていますので、フィルタリングの重要性がわかっただけかだと思います。今後の課題は、フィルタリングの正しい知識をもっと広めていくこと、そして導入率をもっと上げて、多くの子どもたちに安心してインターネットを楽しんで貰う

ことだと考えています。

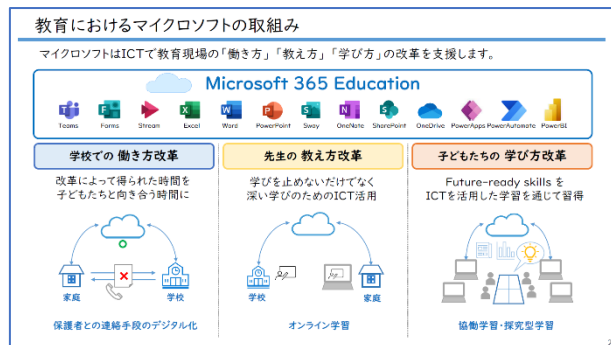
■日本マイクロソフト株式会社 侘美様

侘美：マイクロソフトの教育における取り組みについて、紹介します。ICT で教育現場の「働き方」「教え方」「学び方」の3つ改革を、Microsoft 365 Education というクラウドサービスをセレクトして支援しています。今日の軸は、教育の現場の学び方改革、子どもたちがどう学んでいくかということだと思えます。この3つの軸は、すごく緊密に連携し合っていると考えていて、この3つを合わせて支援をしています。

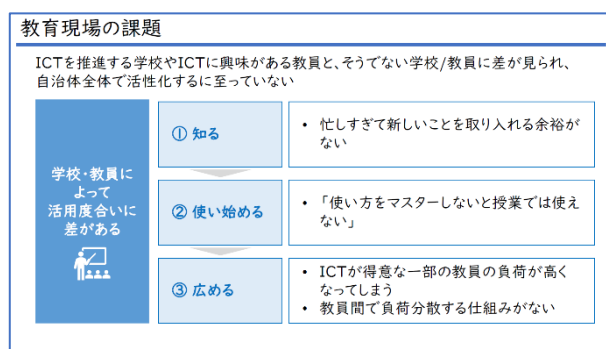
メインである子どもたちの学び方改革ですけれども、文科省の方がばく大な予算をかけて、国を挙げて ICT 活用を進めているのは、この新しい Society 5.0 時代を生き抜くために、新しいスキルを習得することとマイクロソフトは

考えています。私たちは6つの C で始まるスキルを提言してしまして、これを Future-ready Skills、未来に備えるスキルというふうに考えています。この Future-ready Skills と ICT、かつ、学校での授業について、1つの事例を紹介します。愛知県立東海商業高等学校様の授業の1コマですけれども、総合学習の授業で、グループ、チームに分かれて、それぞれが地域の課題を設定して、どうやって解決しようかを話し合う、こんな一連の授業をされたそうです。とあるチームは、放課後の児童クラブを訪問して、そこでは多数の紙作業、管理が非常に煩雑な情報が溢れているということを目にして、何とかこれをデジタル化することによって解決できないかということに至り、最終的にはローコードのプログラミングで簡単なアプリを開発して、それを職員の方に使っていただくことで、職員の皆さんの作業の効率性を図ったということでした。プログラミングをすること自体も ICT が主軸になっているけれども、1つの成果物を作るにあたって、グループでディスカッション、議論を重ねたり、それもその場になくて、いろんな所から議論に参加したり、お互いに話し合うことによって、さらにアイデアを見いだすというような、紹介した6つのスキルを全部組み込んで一連の授業がされているということでした。企業としても日々の活動をしていて、常に求められているのに、高校生ですでにしていることは、すごく素晴らしいと思えました。最終的にはこういった姿ができるといいと、私たち企業としては考えています。

一方で、先生方は非常に忙しいなか、GIGA スクール構想が始まって、まだまだ現場でも課題があると伺っています。一番多いのは、学校、教員の方々によって、活動度合いに差があるということです。先生方は忙しいなか、新しい ICT の道具を渡されて、それを知らなきゃいけない。さらに授業で使うことに対して、いろんなハードルがあるようで



す。知った先生に何でもかんでも質問が来て、その限られた先生に非常に負荷がかかっている。逆に、この先生の授業はすごくタブレットとか、クラウドを使うけれども、こっちの先生はぜんぜん使っていないのが、今の過渡期の状況かと思えます。



<<ディスカッション>>

竹内：皆さんに取り組み、施策を発表いただきました。3つの論点が出てきたと思います。GIGA スクール構想は、コロナとかで要請があって、4年計画を1年で発車したので、いろんな不具合も出てきて、今、みんなで頑張っている。当然、進捗にかなりの差がある。実際に困っている自治体もたくさんある。そのことを、方向性をみんなで探っていきたい。それぞれ団体を背負うと話せないなので、皆さん個人としての意見もどんどん言ってください。よろしくお願いします。

■テーマ1：これまでの成果

竹内：最初に、成果について考えていきたいと思います。高校生諸君、どういうことが一番やっていて、成果として良かったのか話してください。

菊池（石狩南高校）：コロナ禍のリモート授業とかで、学級閉鎖で学校に行けなかったときに先生とやり取りできたというのは、結構良かったなと思います。

角田（美原高校）：学校で Teams をかなり活用していて、文化祭をオンラインでやったのです。去年は、コロナ禍で、学年開催だったので、Teams にみんなで動画を挙げたりした。うちのクラスはホラー映画を作って、それをみんなが家で見るみたいな形で文化祭をやったのです。そういうところが、成果の一つかなと思っています。1年生、3年生が私たちの学年（2年生）のものを見られなかったのが、配られたスマホ端末を使ってみんなが家で見ていた。彼は自宅で見っていたの。

大西（美原高校）：先輩のホラー映画とか、ダンスとか、動画のファッションショーとかがあって、いろいろ見られた。学年開催って言われたときに、他の学年のが見られなくてちょっと残念だなんて思っていたんです。でも、オンラインで見られてデータとして残るので、あとで見返したいときに何回も見られたりして、こういうのもあるんだというので、すごくうれしかったです。本番だったら一回しか見られないじゃないですか。

渡辺（関西学院千里国際）：私は個人的に批判的思考力ですね。ほとんど無法地帯なので、ネットに常日頃触れているというのは、信頼できる情報なのかどうなのかを自分で毎回見極めないといけないということなので、ネットの情報以外でも、ニュースの情報が本当に正しいのかとか、そういうことも身についたかなと思います。

竹内：なるほど。先生も誰も守ってくれないから、自分で自衛しないとイケないってことだね。2周目行きましょう。ネットを活用していて、こういう所が良かったとか、こういう所はうれしいとか。

菊池：1～2年生のときに、毎週末にアプリで宿題を出されていて、アプリを使って宿題に答えるのはどこでもできるし、結構手軽にできたので良かった。スタディサプリっていう、私たちがやっていたのは英語の宿題ですけど、英語の問題が出てきて、それに対して答えていくというのをしている、それで英語の力も身につけて良かった。

角田：私たちは Classi を使っている。そこでアンケートを採ったりとか、朝学とかも Classi でやったりとか、ポートフォリオっていう話を自分たちの PowerPoint でもしたんです。自分たちの意見を書いて、先生に返却して、意見を返してもらうようなことをやっています。

竹内：先生に意見をダイレクトに伝えられるから、先生からレスポンスもあるわけか。それで先生が近くなった。近くなった実例があれば教えて。

大西：ポートフォリオって、先生と生徒での1対1のやり取りなので、家とか、学校とか、場所に関係なく、メッセージを送ったりできるのです。先生の負担になったりするんですけど。あとは自分の意見とかをいっぱいポートフォリオに書いたりできるので、本当に会話しているみたいな、面談している感じのできるのです。距離が縮まると思います。

竹内：普段だったら40対1だけれども、先生を独り占めできるわけだな。

長谷川（関西学院千里国際）：論文を読んで、いくつかの参考文献に指定する宿題とかがあるのです。そういう論文を読むとなったら、図書館に行って、本を借りてやらないといけなかったけれど、たぶんコロナで、ネットで調べる需要が高まってきたからなのか、Google のなかでも、論文をまとめているサイト Google Scholar ができたんです。それを使えるようになってから、資料をまとめたりするのがすごく便利になったので、これは成果ですね。

ネットのなかで読めるようになったし、今まで信ぴょう性が低いと言われていたけど、逆に今は、論文をまとめているサイトがあるから、そこに書いてあるのはちゃんとしているよ、みたいに、学校がぜひ使ってねという方針になったんです。

竹内：なるほど。調べ方まで教えてくれるようになったということだね。

長谷川：たぶん最近 Google が調べ方をアシストできるサイトを強化したんですよ。今までは、アクセス数が高いやつが上に出てくる感じだったのが、今だと、例えば地球温暖化、論文ってキーワード入れたら、地球温暖化についての論文だけをまとめたサイトがあるのです。そこをぜひ使ってねと学校側から言われる。

渡辺：最初に先生方はガバメントとか、URL をどう見分けるとかは教えてくれますけど、そのあとは体当たりです。

竹内：その体当たりするなかで失敗したり、分からないときがあったときのアシスト役に先生がなってくれる。

渡辺：そうです。その丸、バツをつけてくださるので、それで自分で解説する感じです。

竹内：聞いておられて、文部科学省の方からコメントをもらえませんか。

武藤：皆さんの意見はそれぞれもっともですね。端末がうまく活用されているのを聞いて、本当にうれしくなりました。いろんな現場からのお話を聞いていて、若干つけ加えるとすると、端末を使って意見交換みたいなのをしますよね。今までだったら意見を言えなかった子も、言いづらかった子も、みんなが意見を言えるようになってきたということはよく聞きます。クラスの雰囲気が良くなってきた話も聞きます。例えば多数決を最終的にするにしても、少数意見についてもう一回議論しようと、端末を使うとすごく効率よくできる。最終的に多数決のあとに、残った意見に配慮するにはどうしたらいいのかまで、小学生でもやれている例が出てきているのは、すごく大きいと思います。高校生だったら、もっとレベルが高いことをやっているだろうなと思っています。

竹内：なるほど。侘美さん、どう思いましたか。

侘美：美原高校の先生とのコミュニケーションが深まったというところで、先生から見ると、40人というのはやっぱり一気に見るのは難しいです。子どものすごく深く入る時間や場所が今まで制限されていたところが、それがこういうふうになって、生徒の皆さんもいいと思っているというのが、私は良いと思いました。高校生になっても、前向きに捉えているというのは、すごくいいことだなと思いました。

竹内：浅沼先生、1対40はしんどくないですか？

浅沼：1対40はなかなか難しいですけど、普通の授業ではなかなか見られない子どもたちの意見を吸い取ってデータとして残しておくことが一番大事だなと思っています。やりがいを感じる仕事ではあります。

竹内：澤田先生、1対1になると、先生の作業は余計に増えますけれども、その辺りはどうですか。

澤田：うちは Classroom を使っているけれど、自分が担任のときは、真夜中でも通知が来て、「先生、明日の時間割は？」とか。確かに働き方改革に反するのかなと思いつつも、逆にそこで親近感を持ってもらえたらなと、怒らずに、返信します。

竹内：一方で、多くの自治体では、条例で教員と生徒のメールとかチャットとかを禁止しています。そういうのを超えて、いろんなことが進んでいけない状況になっていると思います。米田先生、どうですか。

米田：本校の場合は、もちろん間違いもあつたりはするけれど、基本は信じているという形なんです。間違えるときは、あまり指導という言葉を使わないようにして、できるだけサポートしていく。サポートして、こういうふうにしたほうがいいんじゃない？とか、こういうところはこうじゃない？とか、必ず振り返らせるような感じで対応しています。

竹内：決めて、やったらいけないと指導するほうが絶対に楽です。結局、やると失敗するから尻拭いが大変なのに、なんでそんな面倒くさいことをしているのかな。

米田：彼らもさっき言っていましたけど、失敗から学ぶということもあります。

渡辺：常日頃メールは打つんですけれど、私は最近、国語科の先生にメールを打つことがありました。そうしたら、メールの礼儀作法を手厳しく、質問した内容よりも多い分量で返ってきたんです。もう一回見られないぐらい恥ずかしかったです。そういう感情とともに覚えています。

竹内：わかりました。あえて自由にすることが返ってしんどいことを先生らが引き受けている。そういうしんどさを乗り越えられない先生方は、やっぱり面倒くさい。私も中学校の教員のときに、担任を持っているときは、クラスの子全員と交換日記をしていた。当時はスマホがないから手書きで全員に書いていた。

澤田：アプリで宿題をする、Classroom で宿題を出すというのは、自分のペースで生徒が学習できるので、とてもいい取り組みです。授業中、例えば課題をやりなさい、時間がない子は家に帰ってやってね、というようにできるので、すごく便利な機能かなと思っています。

菊池：石狩南高校では、Google Classroom というアプリはみんな入れているけれど、使っている人が少ない。3年生になって、やっと進路希望調査がオンラインで行われている。体温調査も、最初は Classroom で毎日やると言ったのに、結局今は紙で出している。ペーパーレス化もできていなくて、本当にぜんぜん使っていないです。活用できていない。

竹内：たぶん Wi-Fi 環境とかを、先生方が一生懸命進めようと思うけど、なかなか進んでいないということだね。生徒諸君も協力してあげてね。

浅沼：コメントを一人ずつ書くという話がありましたけれど、私も40人分やるわけですけど、それがパソコンになってコメントが定型文で打てたり、手書きよりはメリットはたくさんあると思います。

角田：OneNote を使っている先生がいて、先生が PowerPoint で英語の授業をして、英文に先生がメモ書きしたのを、あとで OneNote に出してくれます。だから、授業を休んだ子とか、ノートの貸し借りがなくなったんです。コロナ禍で A 班と B 班で、登校が違ったときがあって、お友達と登校日が違うと、ノートの貸し借りができなかった。先生のほうから OneNote が提供されると、授業がしやすいなと思います。

渡辺：一個人の意見ですけれど、うちの学校は少人数制をすごくプッシュしている学校なので、だからこそできることだなと思いますし、人数が多いと負担がかかるというのをすごく感じます。

■テーマ2：現状の課題

竹内：だいたい成果は分かりました。次に、課題について考えたいと思います。まずは、たつの市教育委員会から、小中学生のことで、どんな課題を感じているか、言ってくれませんか。

田淵：たつの市は、1人1台端末導入が突然であったこともあり、正直、準備が間に合わなかった。そのなかで、どうせ1台端末を子どもたちが持つのなら、子どもたちが自ら学

びを広げられるツールにしたい、また、自分たちの世界をさらに広げられるツールになったらいいということで、最初はできるだけルールで縛らないで、より良い使い方をできるように進めています。平成24年度から中学生サミットをずっとやってきて、子どもたちが生徒会中心に、自分たちのルールは自分たちで決めていこう、自分たちの課題は自分たちで解決していこうという体制を作ってきた。子どもたちが決めたルールを守っていこう、守らせていこうという流れがあります。ただ、それが全体になかなか浸透しないというのが課題の一つでもあります。また、自由に使わせると、やっぱりトラブルもあります。トラブルが起きたら、現場の先生方からは、やっぱりルールで縛ってほしいという意見が出ることもあります。今後は集中的に、例えば教員、先生らが児童生徒の利用状況を把握できたりとか、児童生徒同士のやり取りが必要に応じて追跡できたりする、先ほどデジタルアーツさんも言っていましたけれど、そういう仕組みが手軽にできるといいと思っています。

竹内：子どもに任せっきりで無理な部分があって、それを大人が何とか支援したいということですね。やっぱり全部自由で、子どもたちに授業中にゲームをやる権利はないな。

田淵：でも意外と、子どもたちは、自分らでしたらいけないことは分かっています。

竹内：分かっているけどやめられない。だからやめさせなきゃいけない。藤井さん、今のを受けてどうですか。

藤井：活用事例なども聞くなかで、インターネットの光の部分に関してはすごいと感じます。ただ、陰の部分を見ないでほしいと、正直セキュリティーの社員としては思いました。もちろんルールを決める、決めないというのは学校のカラーにもよりますが、取り返しのつかないトラブルに遭ってしまった場合をとっても心配しています。例えばメールのマナーが間違えてしまったとかだったら、怒ってくれる人がいて、社会に出る前に止めてくれればそれでいいです。例えば個人情報を漏えいしてしまったとかだと、やっぱり人生を左右する問題になったりして、大人になってもそのデータが一生残ってしまって苦労するので、そういうことが起こらないためにも、やはりある程度のルールは、システムのほうでも作っていくべきだと思います。

竹内：大人の責任として守ってあげたいということですね。マイクロソフトさん、どう感じられましたか。

侘美：これは実は、GIGA スクール構想が始まったときからずっと私たちもお伺いしていた課題で、正解はまだないと思います。私たちのクラウドサービスも、例えばチャット機能を子どもたちだけで一つのグループを作ってやり取りをする。それを先生が全然見られない場所でやることを心配する大人たちもいる一方で、小学校、中学校、高校という先生が守ってくれる世界を卒業したら、みんなさらけ出される所に行くわけなので、なるべく学校のなかで正しい使い方、クラウドサービスのよさ、怖さもちゃんと学んでほしいと言う人もいます。どこで落としどころをつけるのかを、日々悩んでいると思います。

当社の製品は生徒同士だけではチャットをさせないという機能があり、必ず先生が入っ

ているグループしか作れない機能もあるので、多くの自治体さんで採用しています。もっと本質的なところで言うと、私たちはデジタルシチズンシップという呼び方をしていますが、どうやって正しいインターネット、クラウドサービスを使うかという、ルールを学ぶようなものも用意しています。こういった、いろんな合わせ技で、この過渡期を乗り越えていくのかなと思っていました。

竹内：僕は、大学院時代、欧米のシチズンシップ教育について深く研究しました。欧米の学校の一部には、スクールコートと言って、生徒中心の裁判所があって、ルール違反をした子を先輩が注意して、子どもたちの自治のなかで学んでいく。日本でなぜデジタルシチズンシップが進まないかという、最初にシチズンシップ教育がないわけです。日本は生徒指導、道徳等、先生が方針を生徒に伝えてきました。子どもたちで、自分で考えさせるという文化が根づかないわけです。だから、まずは子どもたちと一緒に考えることが重要なのです。今日の子供たちは自分自身が考えています。その考えを大人に対して発言して、一緒に考えようとしてくれています。大人にも子供にも、素晴らしい学びの場だと思います。武藤さん、どう思われましたか。

武藤：いろいろ思いました。セキュリティーについては、基本的なセキュリティーソフトに対する地方交付税の措置はしています。ただ地方交付税はどさっと来るので、市町村がセキュリティーソフトを導入するかどうかについては自治体それぞれの判断なのです。ここは教育委員会の方が頑張っていて、そのための予算措置することが必要ですが、なかなかそれがうまくいっていないところもあります。もうちょっと僕らもサポートしないといけないと、聞きながら思いました。あとは、やっぱり子どもたちがそれぞれ自分たちで考えて、ルールメイキングまでしていくというのはとても大事だと思います。近々改訂される生徒指導提要のなかでも、そういうルールメイキング的なことはきちんと位置づけてやっていると言っています。自分たちで考えるのはすごく大事だと思います。卒業したら何もないところに出ていくわけなので、学校に在席しているうちにいろいろやっていくことが大事です。例えば、チャットを禁止したら、おそらく民間のソフトを使ってチャットをするだけの話なので、先生方は大変で、教育委員会もわれわれもやっていくべきで、そのためのサポートを頑張っていきたいと思います。

竹内：生徒指導提要はもうすぐ出るけれど、ICT の分は実は僕が書いたのです。そこで重要なことは、子どもたち自身に考えさせるということです。文部科学省がやった、携帯電話の学校の持ち込みに関する有識者会議の座長でした。今回は持ち込みを認めなかったけれども、中学校のなかで、自分たちでルールをつくって、親も一緒に考えて、学校でもルールをしっかり授業をするところは、中学校でも持ち込みを認めてもいいということを打ち出したのです。これは歴史的指導感の転換で、今、子どもたちが自分らで考えていくという方向に行っていると思うのです。そういう意味で、関西学院がやっている校則がないというのは、2周ぐらい先を行っているから、そういう子らが無法地帯のなかで学んでいるというのは、これは素晴らしいことと思う。どう感じたか、順番に聞きましょう。

菊池：子どもたちが自主的に考えてルールを作っていくのは大事だと思うし、そこで何かトラブルがあっても、トラブルを解決するために先生とかはいると思うので、そこで先生と生徒が関わり合って、信頼を深めていって、どんどん仲を深めていって、学校でしか築けない仲を築けていけたらいいな。

竹内：学校でしか築けない、学校が安全な失敗をできる場になってほしいということだね。それは非常に重要なことで、町田市で学校配布のパソコンで悲しい事件があったから、みんな日本中がチャットを閉めたけれど、間違いと思っている。学校で起こることを、しっかりそのなかで安全に失敗させることをしないとイケない。

大西：たつの市の準備が間に合わなかったところに共感します。自分たちも高校に入って1人1台端末として、パソコンが貸与されたけれど、小中学校でパソコンのタイピングとか全然やっていなくて、パソコンの扱いも良く分からなくて、それで Wi-Fi とか言われた。難しく、急にいろいろ言われてもできないと思います。オンライン授業も参加できなくて、どうやったらいいか分からないというコメントが来たりとかしていた。

角田：その話に追加して、私は家がひらがな入力だったです。高校に入るまでずっとかな入力をしていました。小中学校もそれで問題がなかったです。調べ学習のときしか使わないから、ひらがな入力をポチポチやっていました。高校に来て初めての授業のときに、浅沼先生にひらがな入力の人はいると聞かれたので、手を挙げたのにガン無視されて、そこから私は、ローマ字入力を習得したのです。

高校に入ってから、かな入力からローマ字入力に切り替えたことで、できる幅がすごい広がった。課題研究という情報の授業や、演劇部で台本を書くのに Word を使うけれど、そこでのスピードが上がって、良かったなと思います。小中学校のときから、みんながローマ字入力をできていれば良かったと思います。

竹内：来年は小中学校に教えに行き、こういう話をぜひお願いします。

長谷川：授業中に触るのは良くないという話についてどう思うかです。やっぱり当たって砕けないと分からないと思います。正直、やったらいけないことなんて、分かっている。授業中に寝たら駄目というのは分かっているけれど、寝ちゃうのは眠たいからなのです。生理現象なので、仕方ないです。結局痛い目を見るのは、最終的に回りに回って、自分に返って来るけれど、でも、そうならないと分からないです。気づいたときには自分が追い込まれて、後悔するのです。何か起きて困っていた人が、こうしないほうがいいと言っても、聞いている側は、自分は何とかなると考えている。ここを根本から無くすのは、無理だと思う。ただ、被害を最小限にすることは、何かしらできると思う。被害が起きて、大人の皆さんがどれだけ被害を小さくできるのかと、僕は思います。

竹内：要するに、失敗はしたほうがいいけども、根本的な本当の失敗はさせないということだね。

長谷川：例えば中学生のときに授業中に YouTube を見て成績を落としたら、YouTube を見ていたからだろってなっていく。大人になったときに、社会に出て、会社でも YouTube を

見ていて結局できなかったときの被害の甚大さの桁が違うじゃないですか。僕は学校がやっぱり失敗ができる場所でもあると思うのです。だから、できる限り自由にして、失敗ができる環境、失敗を補える環境を作るのも学校だと思います。

竹内：だから、失敗できるものしか生徒に提供するなど。

長谷川：僕は、大学に行けないぞって言われ続けていたのです。自分で気づいたのが半年前だった。ぎりぎりまで追い込まれて、初めて自分がやばいと思ったからこそ、改心して、今は勉強しないとイケないと、ちゃんとやるようになった。この体験がないと、たぶん僕は変わっていなかったと思います。

竹内：体験に裏打ちされた重い言葉だな。藤井さん、聞いていて思ったことをどうぞ。

藤井：高校生とは思えないぐらいすごくいい視点、大人な意見だなと思いました。私も基本的には、大人からルールを一方向的に押しつけるのはよくないと思っていて、そこから子どもたちが得る学びがほとんどないと思っています。別の教育委員会で、私も子どもたち自身にフィルタリングのルールを考えさせたりしています。その教育委員会では、YouTube をフィルタリングでブロックしていたので、子どもたちからすると不服だったみたいでした。そこで子どもたちが教育委員会に YouTube を見させてほしい、こんなことにも、あんなことにも使えるというプレゼンをすることになった。結局、教育委員会からすると、やっぱり授業中に使う子が絶対に出ると分かっているの、時間を決めて許可するという方向に、今考えているみたいです。大人からすると失敗してほしくないというのが大きくて、子どもからすると信用してほしいという気持ちがあるので、その間を取ったルール作りができたらいいと思いました。

竹内：回答を考える、その折衝が大事ということだね。

■テーマ3：これからの方向性

竹内：次の話、方向性について考えていきたいと思います。まず先生方が、今聞いていてどんな方向性があるのか、それを受けて、たつの市教育委員会の方がどう考えていったらいいのか。その辺りについて、考えてもらいたいと思います。最初に澤田先生、お願いします。

澤田：一生懸命先生方、個人用端末を使うように頑張っています。しかしながら、先生の年齢層によっては、端末をなるべく見ないようにする先生方も若干います。先生方のリテラシーをどういうふうに高めていくか、そして、生徒にどういうふうに活用を進めていくかというのが、難しいところかと思っています。僕も授業で使っていますけれど、重たい端末を持ってきてもらう以上は、それに値する授業をやらないとイケないという思いはもちろんあります。また、手軽に配信できるスタジオが各学校にあると、すごくやりやすいと思います。

竹内：要するに、教える側も難しすぎる、やるにも場所がないということですね。侘美さん、先生方が頑張っている事例、思いつくことを言ってください。

侘美：よく伺う課題、悩みと思います。マイクロソフトからの提言を2つです。一つは、生徒から先生に教える。あとは生徒同士で教える。こういうことができるのが、デジタルのいいところです。私も、高校生の皆さんのデジタルネイティブさには、正直追いつけないです。小中高校生のキャッチアップの速さってすさまじいものがある。それで先生方は、自分が教えることを一旦ちょっと諦めましょう。生徒の皆さんも、先生から教えてもらうものではないということを、みんなで一緒にやるのが自分たちに必要なんだということを、ぜひ、一度考えてもらいたいと思います。

もう一つは、先生のリテラシーを高める一番手っ取り早い方法は、授業でいきなり使うには先生はハードルが高いので、校務で使う。例えば一つのコミュニケーションの場がチャットです。全校で一つの、全先生が入るチームを作って、一日一個誰かが何かをやるだとかしていくと、先生みんながそのなかに吸い込まれていくような仕組みになるのです。そうすると、教え方のプロの先生方は、じゃあこれは授業でどうやろうかというのが、比較的イメージしやすくなる。本当によくお伺いするお話です。

竹内：先生が普段使いでやったらいいということですね。つけ加えると、関西学院高等部では、ICT委員会というのを作って、先生方に教えるわけです。例えば生徒に Word を印刷して写真を撮って送らせているのを、Word を送らせたらいと先生に教える、みたいなことをやっている。そういう生徒と先生と一緒にやっていくことが必要なのかもしれないね。浅沼先生、どうですか。

浅沼：できる子とできない子がいるなかで、やっぱりできない先生とできる先生がいる。教育のデジタルトランスフォーメーションが進むなかで、できない先生のケアを学校としては手厚くしていく。うちの学校では、パソコン委員会という得意な先生を集めて、できない先生には研修とかをやって、とにかくやってくださいと言っています。もう一つは、生徒に対するケアですけれど、ローマ字入力とかかな入力の話がありましたが、小中学校の段階で、少し端末に慣れて高校に来てほしいというのが高校現場の思いです。基本的な入力ができないと、高校での端末を使った学び、論文を書いたりが難しくなるので、最低限のスキルは小中でしっかり磨いてほしいと思います。

竹内：そう考えると、小学校1年生からの学びがすごく重要になってきますね。武藤さん、どうですか。

武藤：美原高校の先生が言っていた、最低限小中学校で磨いてほしいことは、その通りだと思いました。キーボードをきちんと使っていない学校も、結構あります。本当に結構心配していて、きちんと助言しないといけないと思っています。あとは、日本全体を見ていくと、小中学校で ICT スキルを身につけた子どもがこれだけ増えてきているのに、高校のほうでそれを受け止めてくれるかという心配のほうで、むしろ大きいという気がします。まだ端末の整備が十分でないところもある。

竹内：高校の受けもしっかりしないといけないということですね。たつの市の方は、2周ぐらい先を行っている子どもたちの意見を聞いて、どう感じましたか。

丸山：本当に高校生の生の意見を聞ける機会がないので、すごく楽しかったです。たつの市の現状として、先生方は本当によく頑張っていて、子どもたちも慣れる次の段階を模索しているところで、次になかなか進めないのは2つあると思っています。まず、教室では全員前向きですから、先生から子どもたちの端末が見られないということがあって、子どもたちが何をしているのだろうという先生たちの不安があります。あとは、学習指導要領に基づいた、資質能力を高めていくような端末の使い方というのは実際にどうなのかを考えたときに、なかなかモデルの授業を見る機会が少ないことが挙げられます。

高校生がどんなことに使っているかと考えると、これは小学校も、中学校も、やっていることは同じです。アンケートを採りますし、スライドでどんどん作るし、コメントもし合う。その深さが違う。例えば高校生の使い方を見て、将来的にはこういう使い方、こういうふうにネットも使うとより深く学べる、探求の過程に深く組み込んでいけるということが分かりました。

最終的に、自分たちが道具として使うと考えたときに、文房具のような使い方をしてほしいと思うので、自分たちで選択ができるようにしていきたいと思うのが1つと、小学校とか中学校で、特に先生たちが活用していく大前提として大切にしているのは、学級経営と学習規律です。

竹内：最終的には、使わせる規律がない無法地帯になってしまう。米田先生、どう感じましたか。

米田：うちの方向性は、簡単にお伝えすると、教員と、生徒・児童、保護者という3つの側面をポイントにすることです。教員と生徒の関係は授業になると思うので、その授業活用、それから進路的なところ、あとは家庭が入ったときに家庭学習とか、そういう部分をどうするか。家庭、生徒、教員と全部に関わる、まさにいろんなコミュニケーションツールであるとかをどうするか。そのなかで一番不安を持っているところを、生徒も教員も家庭も人によって違いますが、それぞれの心配項目をまずは挙げて、その部分をみんなでサポートしています。高校生としては、まさにBYODという環境で、それぞれの期待と不安をできるだけ期待に変えていこうと思っています。

竹内：今日の議論で一番出てきキーワードは先生ですね。結局生徒をちゃんとしようと思ったら、先生の支援がいる。その先生をどう支援していくかというのは、侘美さんがいるマイクロソフトとかで頑張してほしいです。

最後にひと言ずつ話してもらって、終わりたいと思います。

■おわりに

武藤：本当に今日は勉強になりました。特に高校生の皆さんや、学校現場の先生方が、いろいろ工夫しながら取り組まれているのはうれしく聞いていました。いろいろ課題も出てきて、文科省がもっと頑張らないといけないこともたくさんあったので、これから予算も要求しますし、財務省と戦いますが、頑張っていきたいと思います。

竹内：武藤さん、生の声をなかなか聞く機会がないと思うので、またこういう機会があれば、子どもたちの声をぜひ聞いていただきたい。子どもたちは、実は意外と賢いです。

藤井：私が知らないような活用事例も聞けて、日本の未来は明るいなと思いました。ただ、のびのびと学習してほしいけれども、やっぱり最低限安全な範囲のなかでのびのびと失敗してほしいので、そこは大人とか、セキュリティーの事業者の仕事だと思うのです。ルール作りなども子どもの皆さんと一緒にやっていきたいとしますし、先生方の使いやすさも意識しながら、今後開発などをしていきたいと、メーカーの一員として思いました。

侘美：子どもたち、高校生の皆さんから大人に対する期待がすごく大きく、ここに対してまだまだ企業としても、大人としてもやらないといけないと痛感しました。最終的には子どもたちに還元する ICT 活用ですけれど、先生方が一番あいに挟まれて大変というのは、企業としては一番優先的に考えていることで、そこはぜひ引き続き企業として善処したいと思います。

菊池：皆さんの話を聞いて、北海道が遅れているというよりは、まだできていないんだと思いました。石狩南はちょっと年齢層が高めの先生が多いので、そこは生徒が先生を支えて、生徒たちの自主性を高めていくことが大事と思いました。

大西：この会議と一緒に参加して、いろいろなことを聞けて、日本はパソコンとか、ICT についてかなり進んでいると僕は思ったのですけれど、課題もいっぱいあって、発展途上で、難しいなと思うところがあった。もっと自分自身も、これから生きる、これからの未来をつくる自分なんで、頑張りたいと思います。

角田：たつの市の子どもたちがどんなことをしているのかを見て、あの小学生が大人になるときが怖いなと思いました。もっとたくさんいろんなことができる子たちが出てきて、私たちは大丈夫だろうかと思います。それに負けないように私たちも精進していかないといけないと思いました。保護者とか、先生とか、私たちよりも上の世代の人たちも頑張らないといけないことを理解したので、いろんな世代の人が支え合って、IT を伸ばしていければいいなと思いました。

竹内：君らの生の声が必要なので、ぜひまた一緒にやりましょう。

渡辺：今回のように、子どもたちは大人が意見を求めたら、いくらでも話すと思いますし、そういう機会がないだけで、まったく反抗心とかもなく、素直な意見を伝えてくれると思いますので、大人の方々から、一步同じ目線に立って質問や提案をしてくださると、とても助かると思います。

竹内：今、言ってくれたことが、まさに今日の答えです。日本は上意下達という、先生様の言うこと、お上の言うことは間違いございませんと、上の言うことを聞くという文化のなかで、道徳という文化が来たので、子どもたちに自分で考えさせることができていないわけです。子どもたちの意見を聞いてやっていくことに、私たちは今特化しないといけないということを、非常に今日は感じました。

田淵：一番心に残ったのは、関学の長谷川くんが言った「学校は失敗ができる場所やない

とあかん」という言葉です。これは、胸に突き刺さった。それで、市教委としては、子どもはもちろん、先生方も、保護者も、やっぱり安全に失敗ができるような支援を今後ともしないといけないし、勉強しないといけないとあらためて思いました。

竹内：最後に、少しだけ話をして終わりたいと思います。私が 2018 年に兵庫県で採ったネットルールを破ったことがある子と、破ったことがない子を比べたデータです。ネット依存傾向のない子は、あまりネットルールを破っていない。ネット依存傾向のある子は、親とのルールは破る、自分のルールは破るで、悲惨です。だけど、生徒会のルールとか、友達のルールはあまり破らない。自分たちが言ったルールは守る。だから、これから私たちが考えたいのは、押しつけるのではなくて、子どもらが考える。データでしっかり出ました。親のルールはどうなのか。それを調べたら、話し合ったルールは、話し合いがないルールに比べて、ルール違反が少ないです。親の言うことも聞けるし、自分の意見も主張し合えるから、話し合いが重要ということです。

見てほしいのは、話し合いをするとネット依存も減るのです。だけど、高校生は変わらない。中学校までは、親の言うことを子どもは聞くけれども、高校になると親は違うわけです。彼女であったり、友達であったり、生徒会であったりの関係なのだろうと思います。だからこそ、親じゃなくて自分で考えていくことが重要と思います。

最後に、ネットは何歳から始めるのが常識だと思いますか。内閣府の調査によると、2歳で過半数が使っている。今日はネットに関して分かっている人が集まっているのに、全員常識がない、実は、僕も常識がない。私たちが分かっているつもりでも、ものすごいスピードで時代は進んでいるのです。デジタルネイティブな高校生も知らない。赤ちゃんが、YouTube を見ている。『お母さんといっしょ』の代わりに YouTube で『アンパンマン』を見ているわけです。だから、すごいスピードで時代は進んでいることを、私たちは考えないといけないと感じています。

ネットというのは文化づくりで、大人だけでは無理だということがよく分かりました。子どもだけでも無理です。子どもに失敗する権利を与えなきゃいけない。大人と子どもが一緒になって、社会全体でやっていく。まずは今日の皆さんから、やっていったらいいと思います。ありがとうございました。

(終了)